

# Nhan hoi Thông minh Khỏe mạnh



やさしく

ニャンハオ

かしこく

トゥオンミン

たくましく

ホェエマイン

校長 明石 清二

## 宮大工 II

今月号も、宮大工の小川 三夫 氏に受けた講義内容の続きです。

建物に木材を使うとき、「北側には北側で育った木材を北向きに使い、南側には南側で育った木材を南向きに使う」ことで、その木はいつまでも生きていくといいます。一本一本の木材の向きにこだわるのが1400年間、建物を残す秘けつなのです。

「木を買うのではなく山を買う」ことで山のどの場所にある木をどう使うかが見えてくるといいます。「粘土質の地で育った木、乾燥地で育った木、使い道がそれぞれ違う」と。

「300年後に丁度いい具合になるように調節する」には、伸縮の度合いを見極め、わざと隙間を作ったり窮屈に作ったりして300年後を待つというのです。

「機械が物づくりの中心になると、機械で処理しづらい木を使わなくなる。造りたい建物に合わせて木を選び、木に合わせて道具を作る」とも話されていました。



法隆寺は中国や韓国から渡来した人の教えで造ったといわれています。確かに屋根を瓦でふく技術などは中国から伝来したのですが、法隆寺には日本独特の工夫があると聞きました。法隆寺は土台を高くして湿気を逃し、その上に軒を長く造って雨をしのいでいるそうです。雨が多く湿気の多い日本の気候風土に合わせて造られたのでしょう。小川氏の言葉の一つ一つに先人への尊敬と宮大工という仕事への誇りを感じました。

日本の古代建築は、檜（ヒノキ）無くしてはありません。先人の教えには「樹齢1000年の檜を使ったら、1000年持つ建物を造れ」といわれているそうです。「法隆寺の檜は、削るとまだ香がする。瓦を外せば軒が反り返ってくる。粘りがある。檜だから長い年月を経た今でも柱が塔を支えているのである。その檜の強さを知り、使い方を知る工人たちが飛鳥の時代にいたのである」「檜の使い方を熟知していたことは、見れば分かる。昭和9年から始まった解体修理で、取り替えた部材は35%、残り65%の部材は当時のものをそのまま使うことができた。これはすばらしい技術であった何よりのあかしである」

講義は教育関係者の集まりでしたので、結びとして話された言葉が印象的であり心に残っています。「人は錐（きり）と槌（つち）を使い分ける。その人の天性がある。見極めるのは大人、いずれ自分で判断できるようになる」と。

教職員一同、今後も子供たちの適性を見付け、無限の可能性を探ってまいります。

## スクールカウンセラー

オンライン授業が長くなり、子供たちの心の平衡が保たれているのか心配ですので、「スクールカウンセラーと話す会（はなすかい?）」を実施しています。昼休みの時間を活用したこの会は中学部を終え、11月から小学部に移行します。都合が悪い場合にはお知らせください。「もし良ければ」といった位置付けですので御理解いただけますと幸いです。